

永島の善光寺

浜北区永島の浜北大橋の近くに「善光寺」と呼ばれる地域があります。そのように呼ばれるようになったのには、次のようなわけがあります。

昔、「一生に一度は善光寺詣」と言われた信州の善光寺ですが、江戸時代には、そう簡単に詣でることはできませんでした。

永島に正吉という働き者で優しい若者がいました。正吉は、病弱な母親との二人暮らしでした。母親は信心深く毎日朝晩、経を唱えていました。そして、口癖のように「善光寺に詣りたい。善光寺に行きたい。」とっていました。

しかし、貧しい上に、体の弱い母親が信州まで詣でることなどできるはずもありません。正吉は、何とかしてやれないかといつも考えていました。

そんなとき、磐田の見付に善光寺からの「出開帳」が来るという噂を聞きました。「出開帳」とは、善光寺の御本尊の分身仏である前立御本尊を奉じて全国各地を巡るものです。

そのことを正吉が母親に告げると、母親は目を輝かせ、どうしても行きたいと言いました。しかし、病弱の母親が見付まで歩いていくのは難しいことでした。

正吉は、母親を背負って「出開帳」に行くことにしました。正吉一人なら、一日あれば、見付まで行って帰って来られるでしょうが、痩せているとは言え、母親を背負ってでは、そうはいきません。前日の朝早く出て、休み休み見付まで歩いていきました。母親は正吉の背で一心に経を唱えていました。

そして念願叶い、善光寺の前立御本尊を拝み、母親はとても喜びました。その笑顔を見て正吉もまた、うれしく思うのでした。その様子を見ていた善光寺の僧の明順（めいじゅん）は、「なんと親孝行な若者だ。きっと阿弥陀様がお救いくださる。」と正吉に声をかけてくれました。

正吉親子は明順に礼を言い、また一日かけて帰ってきました。それから母親は、以前にも増していただいてきたお札の前で、熱心に経を唱えるのでした。

見付の「出開帳」に行ってから、半年くらいたつと、不思議なことに母親の体調は改善し、畑仕事にも出られるようになりました。

「これは善光寺のお札のおかげに違いない。」

と噂が近隣に広がり、お札を拝ませてほしいと、多くの人が正吉の家に訪れるようになりました。時には正吉の家の前の道がお参りの人で長い行列ができるほどでした。

いつしか正吉の家は、「善光寺」と呼ばれ、その家の前の道は「善光寺通り」と呼ばれるよう

になりました。

しかし、この噂が、信州の善光寺にまで届き、僧たちは、このことを苦々しく思いました。そこで、貫主の前に集まり、どうしたものか話し合いました。

「僧侶もおらず、ただの百姓の家が、『善光寺』などと呼ばれているとはけしからん。」

「これは、善光寺として、見過ごすわけにはいかん。」

と、多くの僧が正吉の家を「善光寺」と呼ぶことをやめさせるべきだと声高に言う中、

「それはなりません。」

と一人の僧が大声で叫び、立ち上がりました。

「私は、遠江の国の見付で、この正吉に札を授けました。正吉のことは、よく覚えております。

病弱な母親を背負い、一日かけて歩き、出開帳にやってきた孝行息子です。私は、熱心に拝むこの親子の姿に心打たれました。この親子の信心をだれが責めることができるでしょう。」

それは、見付で正吉に声をかけた明順でした。

明順の話にだれも何も言えなくなっていました。しばらくして、皆の話を聞いていた貫主が、静かに口を開きました。

「正吉とやらの信心、その母親の信心、そして、明順に授けた札を拝もうと集まる多くの人々の信心、それは我らの信心と何も変わるものではない。仏とは、あらゆる人の心の中におられるのだ。百姓であろうが、僧であろうが同じである。しかも、我が善光寺の名のもとに人々がさらに救われるなら、これほどうれしいことはない。どうだろう、明順よ。そなたがその遠江の国の『善光寺』の住職となり、そなたが学んできた仏の道を説いてやったなら、さらに多くの人々が救われるとは思わんか。」

その言葉を聞いた明順は、

「はい、喜んで参りましょう。」

と答え、すぐに永島に向かいました。

突然、訪れた明順に正吉は驚きましたが、その理由を聞き、大変喜びました。

信州の善光寺から僧侶が来たことは、すぐに多くの人々に知れ渡り、寺を建てることに協力を申し出る者が何人もいました。寺はあっという間に出来上がり、正吉親子は明順の手助けをして寺を盛り立てたのでした。

それから永島の善光寺は明治時代まで続きました。しかし、度重なる天竜川の洪水で、永島の家々と共に寺は流されてしまいました。そしていつしかそこに善光寺があったことは忘れられてしまいましたが、「善光寺」という字名と「善光寺通り」という通りの名前だけは現在まで伝わっています。